



ある稼業



川崎ゆきお

「涼しくなってきましたなあ」

「夏も終わりですねえ」

「それは寂しい」

木陰での会話だ。

「暑いから、早く涼しくなればいいって、言ってませんでしたか」

「言っていたのう」

「冬もそうですよ」

冬場は木陰ではなく、その横の岩場に座っている。当然日向ぼっこのためだ。

「早く冬が終わり、暖かくなればいいなど、確かに言っていたのう」

「そうですよ」

「しかし、夏は違う。過ぎゆく夏に寂しさを感じる」

「じゃ、また残暑で、暑さがぶり返せば歓迎ですか」

「いや、それは夏の残り火じゃ。それこそ寂しい。その暑さがな」

「僕は夏中、ずっと休んでいました。長い夏休みでした。しかし、もうそろそろ動かないと」

「夏休みが終わる。うむ。それは寂しい」

「夏場は暑いので、どうせ何も出来ないと思っていましたから、ぼんやりとしていました」

「ずっとぼんやりしておればよかろうに」

「涼しくなってくると頭も冴えてきますから、いろいろと考えることが多くなります。それもシビアに」

「なるほど、わしは何もしておらんから、特にそういうことはない。ただ、季節の移り変わりを見ているだけじゃからのう」

「そんな寂しいことをおっしゃらないで、いろいろとおやりになってはいかがです」

「もうやるべきことはやった。それにこの歳では、もう、しんどいわ」

「そうなんですか」

「しかし、ご隠居の噂は未だによく聞きますよ」

「昔のことじゃ」

「結局一度も捕まらなかったんですね」

「はははは」

「僕たちはそれを理想としています」

「そのかわり、仕事が小さい。だから、蓄えも少ない。あれだけ働いたのにな」

「いえいえ、捕まらないことがすべてですよ。大原則です。基本です」

「運が良かったのじゃろう」

「それで、夏も過ぎるので、僕も仕事をやりたいと思うのですが、何かありませんか」

「しばらく休んでおると、大きな仕事を狙うもの。それはやめた方がいい」

「そうですねえ」

「わしのところに来て、いい情報はないぞ。もう引退したんだから」

「出来れば組みたいと思ってます」

「馬鹿なことを言うものじゃない。捕まりたいのか」

「いえ」

「わしが捕まらなかったのは一人働きだったからじゃ」

「ピンですね」

「組むと互いに引っ張られてしまう。仲間をおいて逃げ出せない性分だしな」

「はい」

「それに危なければ、引き返す。これは肝心じゃ。それを相手に伝えても承知しない」

「はい」

「組めば獲物は大きくなるが、リスクも大きい」

「分かりました」

「まあ、ぼちぼちやることじゃな。無理をせんと」

「はい、心得おきます」

その後、この若者は二度とその木陰には現れなかった。

了